

- 7 [土]—8 [日] 市民と創造する演劇
『グッバイ・フランケンシュタイン—穂の国の怪物たち—』
◎PLAT主ホール
- 7 [土] 増田達斗プロデュース企画 《新演奏宣言》 vol.1
巡り合う胎動—敬愛するシヨパンと共に—◎PLATアールスペース
- 8 [日] GRUPPO FRESCO #5 グルッポフレスコどうぶつえん
◎PLATアールスペース
- 12 [木] (株)さんぼう 進路相談会 豊橋会場◎PLATアールスペース
- 13 [金]—15 [日] ええじゃないか とよはし映画祭2020
◎PLAT主ホール・アールスペース
- 17 [火] 安藤忠雄氏 講演会「まちは人がつくる」◎PLAT主ホール
- 19 [木] プラットワンコインコンサート2019 Lis
『歌の翼に乗せて～3人の女たちの饗宴～』
◎PLATアールスペース
- 20 [金・祝] 清塚信也 47都道府県ツアー 2020「名曲宅配便」
◎PLAT主ホール
- 20 [金・祝] ぼこあぼこ びあのきょうしつスプリングコンサート
◎PLATアールスペース
- 22 [日] 第34回 豊橋素人歌舞伎保存会 定期公演
◎PLAT主ホール
- 22 [日] ドレミ～な♪ピアノ教室 第17回 発表会
◎PLATアールスペース
- 24 [火] 第25回 開拓塾卒業ライブ◎PLAT主ホール
- 28 [土] 豊橋中央高等学校 吹奏楽部
第22回 定期演奏会◎PLAT主ホール
- 28 [土] 笑いの学校 第13回例会 春風亭昇吉独演会
◎PLATアールスペース
- 29 [日] 野口奈津子 ピアノリサイタル
◎PLATアールスペース
- 30 [月]—1 [水] 豊橋演劇鑑賞会 第277回例会
劇団東演『マクベス』◎PLAT主ホール
- 30 [月] 近藤音楽教室 ピアノ発表会◎PLATアールスペース

- 5 [日] 歌を愛する会主催 菜の花歌まつり
◎PLAT主ホール
- 11 [土] TRIO de CANTABILE◎PLATアールスペース
- 18 [土] 豊橋音楽連盟 第2回 新人演奏会
◎PLATアールスペース
- 19 [日] 森谷真理 ソプラノ・リサイタル
◎PLAT主ホール
- 23 [木] 大学・短期大学・専門学校 進学ガイダンス
◎PLATアールスペース
- 24 [金] 西垣恵弾・鈴木雅子
ヴァイオリン&ピアノ DUO コンサート
◎PLATアールスペース
- 25 [土] 第6回 くらしときめきアカデミー 合同発表会
◎PLAT主ホール
- 26 [日] さなぎ会 発表会◎PLATアールスペース



表紙/近藤芳正『ナイフ』
裏表紙/吉田小夏『グッバイ・フランケンシュタイン』撮影:金子愛帆
企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン/味岡伸太郎+有限会社STAFF
令和2年2月発行 42号[隔月発行]



TOYOHASHI ARTS THEATRE
PLAT

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2020年3月-4月
vol.42



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

PLAT NEWS

CONTENTS

表紙：近藤芳正

2

INTERVIEW:1

市民と創造する演劇

「グッバイ・フランケンシュタイン—穂の国の怪物たち—」

ただ健康的で清潔なだけでは
人間の多面性。

吉田小夏

6

INTERVIEW:2

「ガールズ&ボーイズ—Girls & Boys—」
この役を引き受けるだけで覚悟が必要
でもそのクマが主人公の性格とリンクする。

蓬莱竜太

8

INTERVIEW:3

近藤芳正 Solo Work「ナイフ」
一番僕らしい登場人物がいる。

近藤芳正

10

TOPICS

小・中学校・特別支援学校に出向いての
ワークショップ&ワークショップファシリテーター養成講座
報告会2019

12

INFORMATION

PLAT 主催公演情報

14

PURA PURA

バラコの寄り道ぶらぶら
「無敵の大人たち」

15

SUPPORT

TICKET CENTER

裏表紙：吉田小夏

PLAT CALENDAR



グッバイ・フランケンシュタイン 穂の国の怪物たち

孤独と絶望というものを知った名無しの怪物は、
自分を生み出した男への復讐を誓うのだが…。

3月7日[土]14:30開演・8日[日]14:30開演

原作＝メアリー・シェリー

脚本・演出＝吉田小夏

出演＝オーディションで選ばれた一般市民／大西玲子、細身慎之介

会場＝PLAT主ホール

INTERVIEW:1



吉田小夏 [よしだこなつ] / 劇作家、演出家、青☆組 主宰。青年団演出部所属。『雨と猫といくつかの嘘』等、4 作品で日本劇作家協会新人戯曲賞に入賞。『海の五線譜』で北海道戯曲賞優秀賞受賞。心の琴線に触れる美しく繊細な対話劇の手法で、一貫して市井の人々を描き、幅広い年代の支持を集めている。近年では、ラジオドラマの脚本や、子供達に向けた演劇の創作など、幅広く活躍。日本各地での滞在制作や、演劇ワークショップにも積極的に取り組んでいる。

時、予想通りの部分と違った部分とかはありましたか。

吉田 — オーディションは時間が限られていたので、具体的な演技やパフォーマンスをやってもらう時間でした。普段どんなことを考えているか、自分でテキストを出してもらうとどうなるか全然知らなかった。お題をもらって詩を書くと、こういう発想をこの人は持っているのか!と、発見がありました。普段自分の中にどんなカイブツがいるかを絵にしてみたり、「自分が好きなものと苦手なもの」を図にしてみたり、頭や気持ちの中を少し覗けたかなというのが面白かった。

矢作 — 脚本には何らかの形でその影響が出ているのですか。

吉田 — オーディションと事前ワークショップ、あと書き上がっている部分までの脚本を読んでもらったブレ稽古を通して発見した、彼らの日常のドキュメンタリー性を展開させて、しっかりフィクションに落とし込んだと思っています。だから一見入ってないと見えるかもしれないですね。一カ所だけ、牛乳飲んでも背が伸びなくて悩んでいる男の子がいて、そこだけ、そのまま入れたのですが、あとは、フィクション化したらこうかなという形になっています。

矢作 — 実際に稽古に入る前の構想を聞かせてもらえますか。

吉田 — 今回はドキュメント性よりも、フィクション性をより高めようとしてはいますが、そうは言ってもやはり出演者の方の身体を空間のメインに置きたかった。19名出れば空間はある程度埋まるというのが今までの市民劇の感覚だったのですが、矢作さんが「実は10人いれば埋まるよ」とおっしゃったので、空間も衣装も詰め込み過ぎず抽象的なものに挑戦します。怪物の役も特殊メイクをするとかではなく、セリフと演技で、演劇ならではの想像力をたくさん使って表現するものにしたい。

矢作 — キャスト17人が17人の登場人物だけではなく、それ以上の様々な登場人物になるようですが。

吉田 — そうですね。主にこの役をとというのはありますが、みんなで語り部になって順番にセリフを言うシーンもあるし、ムーブメントでみんな一つのものになるところもある。一役しかやってない人は誰もいない。

矢作 — オーディションで選ばれた17人の人たちにあとお二人。大西玲子さんと細身慎之介さんになぜ出演してもらおうと思ったのですか。

吉田 — 大西さんは私が主宰している劇団・青☆組のメンバーで、ずっと一緒にやってきた俳優です。演出家が求めているものの体現者として期待しています。いろいろなワークショップでもアシスタントとして一緒に活動していて、滞在制作や、そこに住む人と演劇をすることに関して強い興味と情熱を持ち、経験値もあり、頼りがいもあります。私は芝居に歌を入れることが多く、今回も1曲入るのですが、そういう時に、音楽的感覚の共通点もあり、そこで歌手ではないけど一緒に歌のリードを、自主練もやってくれるかなというのがありました。細身さんは劇団員ではないのですが、近年何作品か一緒にやっていま

矢作 — いよいよ稽古が始まりますが『フランケンシュタイン』を、市民と創造する演劇で取り上げようと思ったポイントはどこでしょうか。

吉田 — 台本の中に「お甲い」という言葉が出てくるのですが、今、日本は災害が起り、解決してないことが点在している。みんなで新しいことをするよりも、痛みと闘っている人に目線を合わせて生きていく時代と感じていた。市民劇では、いろいろな仕事、家庭、ライフスタイルの方がいて、いろんな年代の方もいる。その誰にでも該当する要素を探しました。

『フランケンシュタイン』の物語は、人造人間の怪物が自分のアイデンティティを得られずに悩むというのが主題の一つで、しかもそれを書いたのが若い女性というところに惹かれました。どんな立場の人でも、自分は何者だろう、自分には価値があるのか、どうして生きてきたのかという不可解さやコンプレックスと闘いながら世界と出会っていく。そんなモチーフをやってみたかった。あとは、市民劇だと明るくて清らかなものとか、とにかく元気が出るものの方が外れにくいけど、ホラーを原作にすることで、ただ健康的で清潔なだけではない人間の多面性を出してみたいと思いました。

矢作 — オーディションの40人程から、どういうことをポイントとして17人に絞っていったのでしょうか。

吉田 — 原作はあるけど、戯曲は翻案して、今回は当て書きをしています。普段の暮らしの中でも、誰もがカイブツになる可能性がある。だから全員でカイブツをやりたいなと思っていたので、アンサンブルを取れるか、グループで何かイメージを共有する力のある人かどうかが、一つのポイント。人数を絞ったのは、一人ずつにしっかりスポットライトが当たるところを作りたい。市民劇の難しさで、どうしてもお休みが出るので、関われる時間が多いのかも重視しました。

矢作 — こういう催し物は、どこでも女性が多いと思うのですが、男女比は意識されましたか。

吉田 — 男女比とか年代にバリエーションが出るようにしたのですが、年配の方たちにすごく面白い方が多くて、蓋を開けたら平均年齢が高くなった。板の上に立っただけでも肉体に説得力があり、今回のモチーフにとっても合っている気がするから、この方はぜひと思いつながら、群像劇としてのバランスを重視し、断腸の思いで絞りました。

矢作 — 事前にワークショップを、すずきこーたさんにしてもらって、吉田さんが外から見るとい形を取ったのはどういう意図だったのでしょうか。

吉田 — 稽古が始まる前に、演出家とは違う講師の人でワークショップをするのを毎年やっていると伺って、こーたさんの進行なら、チームワークが深まり、当て書きの為のヒントにもなるなと。一人一人のパーソナリティー、ドキュメンタリー、人柄が自然に引き出されるようなワークショップを通し、グループの息を合わせることを楽しむ感覚を掴んでもらうということをお願いしました。

矢作 — オーディションの時と、ワークショップを見た

稽古を通して発見した、彼らの日常の中のドキュメンタリー性を展開させてフィクションに落とし込む。

ただ健康的で清潔なだけではない人間の多面性。吉田小夏

脚本・演出

聞き手 矢作勝義 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 芸術文化プロデューサー



2019年9月21日
事前ワークショップ
進行役にすぎきこーたさんを招き、オーディションで選ばれた17名を対象に、自分の中にいる怪物を絵にしたり、「こだわりマップ(好きなもの、苦手なもの)」を作成することで、自分たちの中にいる怪物をより具体的に考える時間となりました。

して、青☆組に出ている以外にCAVAというパントマイムですてきな作品を創っているカンパニーに所属しています。身体性のプロなので、今回振付家の方は招かずに、専門性の高い彼の視点を借りて、安全で豊かなムーブメントを創りたい。細身さんが青☆組に出て、お客さんとやるミニワークショップにアシスタントで入ってもらった時の様子を見て、専門家としての意識は高いが、先生にはならないで同じ高さに立ってリードできると思った。経験値では先輩というぐらいの距離感で、相手を尊重しながら上手にリードできる点魅力でした。
矢作——ブレワークショップに一旦戻って、伊藤和美さんには過去の市民劇や高校生の際にも何回か来てもらっているのですが、ボイストレーニングに来てもらうとやはり結果が違いますね。
吉田——一緒に発声もやりました。すごく楽しくて、専門用語がわからなくても、イメージで自然な発

声ができるというのを導き方に感動しました。市民劇に私が挑戦する中で、今回が一番大きいホールですが、演出の工夫で身体は見せられると思うのですが、声は1ヶ月頑張らただけで出るのかと不安がありました。実際にレッスンを受けて、このホールでやる自信がみんなに付くだろうし、歌のシーンを入れようという踏ん切りも付き、いい出会いでした。
矢作——今も出ましたが、この大きな空間は初めての経験。どう料理しますか。
吉田——いつも舞台美術をお願いしている濱崎賢二さんを誘えたので、空間の大きさをより豊かに見せるための工夫はまず美術の段階でしたいと思っています。あとはどう使うかですが、一目見て「なんてカッコいいんだ」と一目惚れする感じがあったので、空間に抗うのではなく、そこにうまく寄り添うというか、助けてもらうつもりでいけたらと思います。クリエイションの面では守り



左:2019年11月30日、12月1日/出演者対象ワークショップ
一般市民の出演者17名と俳優2名が全員揃っておこなったワークショップ。ヴォイストレーナーの伊藤和美さんによる発声・歌唱のレッスンからはじまり、この日までに書きあがった脚本を全員で読むことや、作品冒頭のムーブメント(振り)を考えるなど、これから創作するうえで必要な要素を試してみる時間となりました。

右:2019年7月19日-21日/出演者オーディション
本番会場の主ホールで行ったオーディションは、40名がグループに分かれて考えた創作ダンスを披露。チーム内で自分の考えを伝えること、相手の意見を聞くことを目的に行いました。2、3日目のオーディションは事前に考えてもらった「自分の中の怪物」の名前と理由を発表しました。

2020年1月7日-13日
第一次稽古
出来上がった脚本を全員で読む「読み合わせ」や、歌の練習を丁寧に行うことで、演出家の求めている表現方法を出演者全員で共有。2月から始まる第二次稽古への準備期間となりました。



に入らず、今まで以上の挑戦はしたい。『ガラスの仮面』という漫画で、黒沼龍三という架空の演出家が、スターに意地悪されて俳優にオファーできなくなる。そこで、街中に張り紙をして、市民にオーディションして、見事に市民だけで新作をやるというエピソードがあります。看護婦の婦長さんを女中頭にキャスティングして、オペの指示をしているように台詞を言ってくださいと言ったら超うまいとか。今回はこれだ!と思って、密かにヒントにしています(笑)。経験値が少ない新鮮味とパワーのみで勝負するのではなく、やはりアーティストチックなものをやろうというメッセージを初日から演者には届けているので、食い付いてきてくれていると思います。
矢作——出演者のハードルはどんどん上げていっていると思っています。スタッフワークはもっと幅広くいろんな人に関わってもらいたいと思っています。出演者の頑張りがスタッフにうまく影響し、スタッフの頑張りがうま

く出演者に影響してより良い作品になってくれることを期待しています。
吉田——今回、染めた布を舞台美術に入れるのですが、その染めをやってもらったら自分が作ったものが見えて楽しいだろうなと思うし、音響家さんとか照明家さんが私がぜひ一緒にやりたいと思える方だったり、舞台監督さんもすごく経験値の高い方だったり。スタッフ陣も素晴らしいです。高校演劇でも、この音響の子はすごいと思ってあとで聞いたら「私、音響のプロになるんです」と言う子がいたりして、スタッフワークの魅力も、わかってくれる子はいる。ここで刺激を受けたり、舞台美術作りの一か所だけでも、自分がやったものが具体的に作品に登場しているのを見てほしいなと思います。
矢作——いろんな人が様々な形でこの舞台に結果を、自分の足跡を残してくれる作品になることを期待しています。



蓬萊竜太[ほうらいりゅうた] / 1999年に劇団モダンスイマーズの旗揚げに参加。以降、座付作家として全公演の作・演出を務める。劇団の代表作として『デンキ島』三部作、『夜行ホテル』句読点三部作『死ンデ、イル』『悲しみよ、消えないてくれ』『嗚呼いま、だから愛』『ビューティフルワールド』などがある。劇団外の作・演出作品に、『ハンドダウンキッチン』『罪』『正しい教室』『星回帰線』、劇作に『パレード』『木の上の軍隊』『ブエノスアイレス午前零時』『漂白』『スコット&ゼルダ』『母と惑星について、及び自転する女たちの記録』(第20回鶴屋南北戯曲賞受賞)『LOVE30〜女と男の物語〜兄への伝言』『Triangle〜ルームシェアのススメ〜』『Triangle vol.2〜殺し屋ジョニーヤマダ〜』などがある。また赤坂大歌舞伎『夢幻恋双紙赤目の転生』の作・演出、映画『ピアノの森』『ピンクとグレー』ドラマ『コールドケース〜真実の扉』『平成細雪』などの脚本を手掛けたりと、活躍の場は多岐にわたる。新国立劇場では『まほろば』(第53回岸田國士戯曲賞受賞)、『エネミー』『消えていくなら朝』(第6回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞受賞)を書き下ろし、『プレス・オブ・ライフ〜女の肖像〜』を演出。

まだ身近にイメージしづらいというか、ちょっと特別で、先を走っている人のように見えてしまう気がします。そこからもう日本社会のあり方が問われるわけですが……特に男性には苦手と感じる人もいるかもしれない。ですから、あまりとつきづらくなりすぎないように、演出と演技、それから翻訳の三位一体で、絶妙な塩梅を探していくつもりです。

しゃべるのは一人とはいえず
この戯曲には
お客様という「相手」がいる

「一人芝居」というものには、以前から関心を持っていらしたんですか。

蓬萊——いや、正直、一人芝居では、ライブの面白さは生まれづらいと思っています。僕の中での芝居の最小単位は二人で、二人の対話を書くのは好きだし楽しいけど、一人芝居は演劇の概念の外側にあるくらいの感覚でした。でも、この戯曲の場合、確かにしゃべっているのは一人だけど、相手はちゃんとして、それはお客さんなんですね。だから、そこに集まったお客さんによっても芝居が変わってくる可能性がある。そこがすごく演劇的で面白いと思いますし、一人の俳優がこの作品にどう向き合い、どう終えていくんだろう、という興味も持ちました。もちろん、そこには演出も関わるわけで、これは体験しない手はないと。

「なぜ自分が演出するのか」という疑問も持たれたようですが、その「距離」をどう埋めていくのが、客席との関係をつくることでもあるという気がします。

蓬萊——この女性は誰に向かってどういうつもりでしゃべっているのか、能動的に話しているのか、しゃべらされているのか、彼女が話す根拠を見つけることが第一歩であり、大きな課題です。お客さんという聞き手がいて成り立つ作品であることは確かなので、稽古場でも、なるべく早い段階から、たぐさんの人の前でしゃべっている状況をつくろうと思っています。

蓬萊さんは劇団では作・演出をされていますし、外部への書き下ろし戯曲も数多くありますが、演出のみを担当することは多くないですね。演出に専念する楽しみはありますか。

蓬萊——「この本を面白く上演する」ことだけを考えられるのは、すごく楽しいです。読み解けない謎にどう向かっていくかはもちろん、いちばんいいのは「この戯曲の弱点ってなんだろう」ってことを俳優と話せること。自分で書いてるととてもじゃないけど、そんな勇気はないし、俳優も遠慮しますから。でも、そういう謎や短所をどう補うか、俳優と共犯関係を結びながら戯曲や作家を攻略していくのは、とても健全なやり方なはず。今回なら、この作家は何者で、なぜこの作品を書いたのか、どんな作品をほかに書いているのかといったところから、長澤さんと二人で紐解き、攻略法を練りたいと思っています。

新国立劇場・情報誌 ジ・アトレ 2月号より転載

ましたね。面白い戯曲ですがやはり問題作で、いわゆる「男性社会」を、女性の目線から痛烈に批判する内容ですから。「小川さんらしいセレクトだな」とも感じる一方で、それを僕のようなオジさんが演出するってどういうことなのか、「お前も学べ」というメッセージなのかといういろいろ考えました。

——自分探しの旅の途中で恋に落ち、結婚。子ども生まれ、キャリアも順調という非常にアクティブな女性がその半生を語るうち、思わぬ男女間の断裂が浮かび上がってくる。「こんな落とし穴があるのか」と驚きつつ、昨今のMe Too運動とも重なるような現在性、普遍性も感じる戯曲です。

蓬萊——グローバルには女性の社会進出についての新しい価値観が浸透しているにもかかわらず、男という動物がそこに追いついていないという現実を突きつけられ、身につまされますよね。社会的な地位や居場所をしっかりと持っているように見える男性ほど、それを失った時の衝撃が大きいというのも想像が付きましますし、だからこそ早めに意識をアップデートし、状況を変えていかなくてはいけない。そういった警鐘を鳴らす意味でも上演の意義はあると思います。また、女性の立場で考えても、仕事に邁進すればするほど、夫や家庭のことが見えなくなることはあるはず。いずれにしても、ここで語られることは、僕らの日常のすぐそばにあることだと思います。

——すべては「恋愛の誤解」から始まるというふうにもとれますから。

蓬萊——そうですね。ある瞬間魅力的だと思っていたものが、勘違いだった、最初からなかったとすれば、もう愕然とするしかないですね。ただ、そういったシリアスな面ばかりに絡めとられるのも違う気もするんです。難しく、最後にカタルシスが訪れるような本でもないですけど、だからこそ僕らの方で明確な救い、祈りを見出してお客さんに手渡したいし、少なくとも主人公の女性のバイタリティやユーモアが救いにもなるような、愛される人物像をディスカッションしながらつくっていきたいです。

——その芝居づくりのパートナーになるのが、唯一の出演者、長澤まさみさんです。

蓬萊——長澤さんが引き受けたと聞いて、「ツフな人だな」と思いました。90分ひとりだけでしゃべる、しかも精神的にも辛いところのある役ですから、引き受けるだけでも、すごい覚悟がいると思うんです。そのツフさが、この主人公のキャラクターともリンクする気もして楽しみです。長澤さんが持っているもとの魅力を活かしつつ、自由に生きようとしてたどり着いた恋愛の楽しさや愚かしさ、人生の面白いこと、失敗……といった多面的な人間の顔をみせられるといいなと思います。そのためにも楽しくつくらないと。

——語り口もフランクですし、今どきの女性という感じがある役ですね。

蓬萊——そうですね。ただ、こんなふうに頭が切れて、強く、言葉のチョイスも面白い女性は、日本人にとっては

です。普段自分がやっていることとはかけ離れていますから、逆にやる意味があるのかなと。これまでも(初めての女性のみの芝居となった『まほろば』、自身の家族をモデルにした『消えていくなら朝』など)新国立劇場では新しい冒険をさせてもらってきましたし、自分にとってもそれが財産になってきた実感はあるんです。ただ、今回ばかりは「どうして僕に話が来たんだろう」とも思

——この作品はロンドン、ニューヨークでもすでに上演され、大きな反響を巻き起こしたそうですね。その日本初演の演出を引き受けるにあたり、どんなことを考えましたか。

蓬萊——小川絵梨子さんが芸術監督になられて、僕もこの新しい体制の中で一緒に仕事をしたいという気持ちにはありました。それに一人芝居で、しかも女性の物語

この役を引き受けただけで覚悟が必要 でもそのツフさが主人公の性格とリンクする。蓬萊竜太

演出

二〇一八年にロンドンで初演され、センセーションを巻き起こした一人芝居『ガールズ&ボーイズ』が、この五月、新国立劇場で日本初演される。演出を担うのは『まほろば』(二〇〇八、二二年)、『消えていくなら朝』(二〇一八年)でも日本の家族、男女の姿を描写した蓬萊竜太。

一人の女性の幸せを恋愛、結婚の先に訪れた衝撃的な亀裂を描く問題作に向き合う心境、ビジョンの一端を聞いた。インタビューー 鈴木理映子 演劇ライター

6月3日[水]19:00開演・4日[木]13:00開演
作=デニス・ケリー / 翻訳=小田島創志 / 演出=蓬萊竜太 / 出演=長澤まさみ
会場=PLAT 主ホール

ガールズ&ボーイズ —Girls & Boys—

PLAT小劇場シリーズ
水戸芸術館ACM劇場&ラ コンチャン
近藤芳正 Solo Work
ナイフ

近藤芳正×山田佳奈のちょっと無茶な挑戦が始まる。

6月20日[土]14:30開演・21日[日]14:30開演

原作＝重松 清「ナイフ」(新潮文庫刊『ナイフ』所収)

脚本・演出＝山田佳奈(□字ツク)

フィジカルコーチ：大石めぐみ

出演＝近藤芳正

会場＝PLATアートスペース

INTERVIEW : 3



近藤芳正[こんどうよしまさき]／愛知県出身。東京サンシャインボーイズに欠かせぬ客演俳優として脚光を浴び、現在はテレビ・映画・舞台と活躍。あらゆる役に深く踏み込む演技力と表現力に定評がある。2001年には自身がプロデュースする“劇団『ダグダグエノ』”を立ち上げる。2009年からは劇団『ダグダグエノ』から派生したソロ活動として、“バンド・ラ・コンちゃん”あらため“ラ コンチャン”を始動し、舞台制作やプロデュース作品も手掛けており、時には作・演出にも関わっている。また若手俳優に対してのワークショップを主宰し、後進の指導にも力を注いでいる。

も通用する形でした。

矢作—— 近藤さんからもアイデアを出して創り上げられるのですか。

近藤—— 稽古に入る前に山田さんが脚本を書いて、大まかにいけるね、となって。それから正月明けに書き直しをもらったので、それを読んでまた打ち合わせ。僕は稽古に入ったら山田さんに任せ、お母さんになったりお父さんになったり。単純にセリフをしゃべるだけではないので、その稽古もやれたらいいなと思っています。

矢作—— ゴールデンウィーク明けから稽古ですが、中々早いスタートですね。

近藤—— 壮絶なセリフの量で、とにかく体のことも、しゃべることも、並大抵ではない。体のプロフェッショナルな人だったら問題ないのですが、スタッフから「どっちか」と苦手でしよう、コンちゃん」と言われるし。山田さんは「近藤さん大丈夫かな」みたいな顔をして、「あなたがやりたいと言ったんだからね」と無言の圧力を受けながら。

矢作—— 本番を繰り返すことで、日々変化があるお芝居の面白さを楽しんでいらっしやると思います。

近藤—— 生は楽しいですよ。映像だとフラストレーションが溜まってしまう時もありますが、生はどんな酷い芝居をしても「終わった」というのがある。その歓喜が、映画やテレビにはない解放感です。芝居が終わった後、感想をいただくこと。それもテレビや映画にはない、演じることの楽しさの原点。生は止められないですね。

矢作—— 時々、負荷をかけることによってお芝居に対する情熱を高めているというか、自分を飽きさせないようにされているように感じます。

近藤—— それはありますね。小学生の頃から催し物があると「僕が書いて演出するからやろう」と言って人を集めたりするなど、自分のやりたいことを受け身でなく自らやっていくのが好きだったのです。

30歳になる時に「辞めようかな」と思い、その時「もし辞めたらスタッフになろう」と。芝居から離れようとは思わなかった。「じゃあ辞めるためには後悔しない方がいいな」と。観たい芝居を観て、出たかったら出たいと言おうと思ったんです。そのうちの一つが東京サンシャインボーイズの三谷幸喜さんの作品で。バイトしながら、年に2本か3本芝居をやるのも「これも一つの幸せだな。こういう芝居をやればいいや。」と思っていたら、三谷さんが注目され始めて。お仕事が来るようになって食えるようになりました。

矢作—— 自分が好きなことを突き詰めたということがポイントでしょうか。

近藤—— 「売りたい、売りたい」というよりも、自分は何をやりたいのだろう、原点は何なのだろうということ。

矢作—— 最後に豊橋のお客さんに今回の公演で楽しんでもらえたらということを。

近藤—— いじめという題材なので応援しづらいとは思いますが、皆さんとの再会の喜びもあり、ぜひ皆さんも「近藤を久々に応援しようぜ」、そんなノリで来ていただけたらうれしいです。

矢作—— 近藤さんには第一回市民劇「市民と創るスケッチ群像劇『話しグルマ』」で豊橋に長期でお越しただけたのは、非常にいい経験になりました。

近藤—— 僕も初めての経験で、市民の方たちはお仕事のあと平日の夜稽古し、その中でチームワークを作り、16歳と60歳の方が初日の本番前にハグをしあって。世代を越えて絆を持って一つの芝居をみんなで一生懸命にやっつて、緊張感もある。セリフを間違えても、ミスをして、「大丈夫だよ」と励まし、それがいい結束力になる。素晴らしい企画だと思います。

矢作—— 今回の『ナイフ』という作品は、一人芝居と小説の『ナイフ』、どちらが先なのですか。

近藤—— 『ナイフ』です。重松清さんの小説が大好きで、お会いした時に、「生意気ですが、いつも自分がそこにいるような感じがするのです」と、お話ししたら、重松さんが「実は私もテレビを観ていて、僕の登場人物がいると思っていたのです」と。そこから意気投合して、いつか何かをやりたいなと思っていた。自分自身でも映画化をと思いつき売込みをしましたが、なかなか実現が難しく、それなら芝居を作ってみよう。登場人物の息子役をどうするかが結構難しかった時に、フッと「一人でもやる方法はあるのかな」と。で、「一人でやってもいいんじゃないですか」と言われ、大変だけどおもしろいかも、というところから一人芝居になったのです。

矢作—— 登場人物の中に、自分に近いものを感じられたのですか。

近藤—— そうですね。弱い、勇気がない、人を守る力も自分にはない。それを胸元にナイフを入れていてだけで勇気がでる。勇気を持って一歩踏み出したことによって、子供との関係や妻との関係、本人の会社での関係とか。ちょっとだけ見える景色が変わってくる。これはこの物語の好きなおところですね。

矢作—— 俳優として一人芝居をする魅力はどこにあると思われませんか。

近藤—— 良くも悪くも自分が責任を負う。悪ければ全部自分が悪いし、良ければ全部が自分のおかげ。もともと人と交流できずに、役を通して人との交流ができるのが楽しくて芝居をやっているのですが、一人っ子で、親も家にいなくて一人で遊んでいたの、人と関わって作るのも楽しいが、これはこれで楽しい。父も子供も妻も担任教師も一人でやる意義は考えてもわからないのです。「歌を歌いたいから、歌を歌うには理由がない」みたいに、「やるしかない。やりたいだけ」。

矢作—— 『話しグルマ』でタグを組まれた山田佳奈さんに脚本と演出をお願いしたのはどういう理由だったのですか。

近藤—— 重松清さんの世界と山田さんが舞台で作る世界がかみ合わないところもあるし、どうだろうということもあったのですが、若い割には男っぽいというか。僕にはない決断力もすごい。彼女がいるおかげで市民たちがまとまったところもありました。重松さんそのままの世界ではなく、山田佳奈というフィルターを通して、現代で

聞き手 矢作勝義 種の国とよはし芸術劇場PLAT芸術文化プロデューサー

出演
一番僕らしい登場人物がいる。
近藤芳正

小・中学校・特別支援学校に出向いてのワークショップ &ワークショップファシリテーター養成講座 報告会2019

2月24日[月・祝]10:30~16:00

【1部(体験する)】10:30~12:30 / 【2部(報告&意見交換)】14:00~16:00

講師:すずきこーたほか / 報告者:ワークショップファシリテーター養成講座受講生

会場:【1部】PLAT研修室(大) / 【2部】PLAT創造活動室B



五十年後の豊橋がどうなっているかを想像し、
劇場を支える人材を育てながら、
この街を支えていく人も育てていく

PLATが実施している「小・中学校、特別支援学校へ出向いてのワークショップ」および「ワークショップファシリテーター養成講座」の今年度活動を報告する会が2月24日に行われます。その両方で講師を務めるすずきこーたさんと当劇場芸術文化プロデューサーの矢作から、学校行きのワークショップに取組み始めた経緯や当初の目的、理想、そしてこれまで実施して分かったこと、継続することでの変化などを話してもらいました。

矢作——学校に演劇のワークショップが行くことにより、子どもたちや学校が変わるということは世田谷パブリックシアター勤務時代に実感していました。

PLATが開館した時に、この規模の地域の劇場がそれをやらない手はないと考えました。同時に、地元のファシリテーター育成も行わないと事業の継続が困難になると考え「ワークショップファシリテーター養成講座」も立ち上げました。

劇場が単に舞台作品の鑑賞機会を提供し、劇場に来てほしいと言うだけでは、今の時代における劇場の役割としては不十分です。それとともに、学校などの地域コミュニティの役割が変わってきた。昔は、学校というコミュニティが機能していたと思うのです。

ある時代までは、下校後に友達と遊びに行ったり、

みんなで何かをしたりすることが当たり前でしたが、今やそういう機会が少なくなっている。遊びの中で身につけていた様々な人と共に考え、作業する能力が身につかずに大人になってしまっているのではないのでしょうか。

それを補完する一つの手段として、学校に出向いて実施する演劇やダンスのワークショップがあり、公共劇場の役割としてその種の事業の実施が必要だと考えています。

すずき——例えば小学校低学年のクラスでも、3回くらい続けて行くとグループ作業が格段にうまくなります。子どもたちの表現も豊かになってきます。また続けて行くことで、私たちの活動の意味を先生方と共有できることも大きいと思います。

私たちの活動は、例えば、誰でもよく知っている昔話などを演劇にします。その時、うまくいかないと、多くの先生はすぐに「こうした方がうまくいくでしょ。こういうふうにはやってみよう」と言ってしまう。でもお互いを見合うことにより、子どもたち同士でも良いところや改善点に気付けます。

意見交換をし、どうやったらもっと良くなるかをもう一度子どもたち自身で考え、練習します。たとえ2分の練習時間でも、見違えるほど良くなるのがほとんどです。「良くなったね」と言われると、その子は嬉しいんです。

教育現場では、自己肯定感を持ちにくいということをよく聞きます。自分たちでステップアップすることは、自分を受け入れることにつながります。物づくりや絵を描くことに比べても、演劇は身体ひとつでやれたり、やり直すことも比較的簡単なので、グループ作業という面で、演劇というフォーマットは、教育現場において良いツールだと思います。

矢作——現代社会において、子どもたちに試行錯誤の場が減っているように思います。私は、劇場が行っている様々な事例を紹介し、最後に自分で企画を考え、それをプレゼンテーションするという授業を大学で担当しています。

しかし、自分でものを考えるそれを他者に提案することを上手にできる人と、できない人がいます。大学に入るまでにこの種のことを体験していない人にとっては、なかなか難しいことのように感じます。それは遡ると、小・中学生の間に、どのようなことを経験してきたかの差だと思います。

豊橋、いわゆる地方の中核市規模より人口が少ない都市では、他地域からの流入による人材が、入ってくることをあてにはできません。

しかし、豊橋は地元回帰志向が強く、ある年齢になったら地元に戻ってきて何かやろうと思う人たちが多くいます。豊橋という街を支え、行政を支え、東三河を支える人材として活動できる能力をいつ、どこで獲得するかが重要です。

たぶん、ある世代に3人から5人そうした能力を持った人がこの地域にいれば、大きく変わる可能性がある。1人だけでは孤立する可能性が高いので、やはり3人くらいで地域を牽引していけば、さらにそれについてくる同世代の人や、その下の世代も出てくると予想します。

毎年3人、高校1年~3年の間に10人くらいいたら、すごい力になる。そういう人材を生み出す環境を劇場が提供し、それを継続するしかないと考えています。

少なくとも50年間は劇場の建物自体は存在すると考えると、50年後の豊橋がどうなっているかを想像したうえで、この劇場を支える人材を育て、同時に周辺にこの街や地域を支えていく人も育てていかないと、せっかくこれだけの費用をかけて作った劇場が、単なる貸スペースとしての建物が残るだけになる可能性があると思います。

すずき——私たちが豊橋の学校に行き始めた2015年に小学校高学年だと、今は高校生です。つまり「高校生と創る演劇」に来ている可能性もあります。そういう経験のある子が来ると、高校生になって初めて演劇と出会う子とはちょっと違う感じで取り組んで行けるはず。そうすると、演劇がもっと良くなる可能性も高いと思います。矢作——人口の少ない都市では学校数・生徒数も少なく全小・中学校にアウトリーチに出向くことが可能ですが、豊橋は学校数も生徒数も多いから、そこまでは行けていない状況です。

将来を考えると、今のうちに手を打つ必要があると考えています。また、ワークショップを指導する人の技術を職業として確立することも同時に必要です。

これを維持していくために、何が必要かを考えて、その理由と成果、それを守るための環境づくりを同時にやっていくのがこれから未来に向けた劇場の仕事です。

すずき——演劇と、社会や自分たちの生活が別な世界にあり、繋がりのない全くの別物と思っている人は少なく



ありません。でも、つくられた作品は生活に繋がっているし、授業やワークショップで協働作業をすることも社会に繋がっているのです。

そう感じてもらえる先生方が増えると、もっと演劇が学校で活かされると思います。アートのまちづくりと言った時、街が華やかになればいいだけではないはず。人と人との関わり合いに、アートをどのように活かせるのか、それを多くの人が考えられると良いなあと思います。

ワークショップとファシリテーターでは、おそらくファシリテーターの方が、汎用性があります。私たちのようにここで活躍してくれる人をつくるのが大きな目標ですが、仕事や家族の中で何かを決める時、どう進めるのかというのもファシリテーションです。

養成講座受講生の中には、講座終了後に学校で美術の先生になった方もいますし、もともと学校の先生の方や、地元の子どもたちとの活動に活かしている方もいます。

劇場や演劇に拘らなくても、地域や社会で活躍する人も同時に生まれることを望んでいます。



すずきこーた / 演劇デザイン
ギルド理事・ワークショップファ
シリテーター・俳優
演劇的手法を様々な場面に
取り入れたワークショップを数
多く進行。多文化共生やまち
づくりの場でのワークショップも
多いが、小中高で演劇を取り
入れた授業も多く、先駆的な
手法は高い評価を受けている。
また演劇を使って討論するフ
ォラムシアターも数多く実施。
日本だけでなく、メキシコ(高
校生)、インドネシア(紛争活
害にあった子どもたち)など活
躍の場は多岐に渡る。目白大
学非常勤講師。(一社)日本
演劇教育連盟理事。

プラット2020年度プログラム説明会



とよはしアートフェスティバル2020
大道芸 in とよはし



立川志の輔 独演会



チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

- 劇場窓口・電話0532-39-3090[休館日を除く10:00～19:00]
- オンライン <http://toyohashi-at.jp>[24時間受付・要事前登録]

U25・高校生以下割引ご案内

- 料金＝U25[25歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:一律1,000円
- 購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
- その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

ガールズ&ボーイズ-Girls&Boys-



長澤まさみ

近藤芳正 Solo Work『ナイフ』



近藤芳正

未練の幽霊と怪物-『挫波』『敦賀』-



森山未來

片桐はいり

栗原類

2020/3/7[土]14:30開演・8[日]14:30開演 市民と創造する演劇 『グッバイ・フランケンシュタイン』

好評発売中

『グッバイ・フランケンシュタイン』
一穂の国の怪物たち-』
3月7日14:30のみ

メアリー・シェリー原作の「フランケンシュタイン」を元に、東京を中心に活動している劇団青☆組の吉田小夏が上演台本・演出を担当します。公募による市民出演者・スタッフとプロのスタッフで創りあげるPLATオリジナルの舞台をお楽しみください。

[脚本・演出の吉田小夏よりメッセージ]
『フランケンシュタイン』は、イギリスの作家メアリー・シェリーが若干18歳の時に書いた物語です。ゴシックホラーとして名高いこの小説を書いたのが、道ならぬ恋に身を焦がす若い女性だったことを初めて知った時、この作品に眠る新しい可能性を感じました。原作に登場する怪物は、最初から最後まで、名前がありません。今回の作劇では、出演者達と一緒に、自分だけの怪物の名前を探すところから創作をはじめました。生まれ落ち世界と出会うまでの、コンプレックスや孤独、葛藤。それは人間の悩みそのものとも言えるのではないのでしょうか？その普遍的な痛みを、様々な怪物の視点を通して見つけ、原作とは違う希望のある終幕を、祈るように探してみたいと思っています。
●原作＝メアリー・シェリー●脚本・演出＝吉田小夏●出演＝オーディションで選ばれた市民朝倉捷、渥美昌史、石川つや子、坂坂重信、伊藤早紀、今栄敬子、上松義和、柿田美紅、加藤浩子、駒沢真司、佐々木宏子、鈴木麗華、玉越渉太、鳥田武、長藤粧子、牧田直佳、森川理文／大西玲子、細身慎之介●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般2,000円、ユース(24歳以下対象)1,000円、子ども(高校生以下)500円

3/19[木]14:00開演 プラットワンコインコンサート2019 Lis(リス)

好評発売中

『歌の翼に乗せて～3人の女たちの饗宴～』
「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選ばれた若手音楽家たちによる音楽のひとつをお届けする、プラットワンコインコンサート。ソプラノ歌手、ヴァイオリン、ピアノの3名で構成されるLis(リス)。実力十分の聴きごたえある3名の共演をお楽しみください。
●出演＝Lis[リス]波多野千夏(ソプラノ)、寛悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)●曲目＝『喜歌劇「ジュディッタ」より熱き口づけ』(レハール)、『ヴァイオリンソナタ第1番長調「雨の歌」第一楽章』(ブラームス)、『愛の夢』(リスト)ほか●会場＝PLATアールスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]500円●上演時間＝60分

5/2[土]14:00開演 プラット2020年度プログラム説明会

2020年度、PLATがお贈りする
主催・共催のプログラムをご紹介します。
●会場＝PLATアールスペース●料金＝(要整理券)※整理券はプラットチケットセンターで3/13より配布予定

5/4[月・祝]11:00～19:00・5[火・祝]11:00～17:30 とよはしアートフェスティバル2020 大道芸 in とよはし

ゴールデンウィークは豊橋に世界で活躍する大道芸人が大集合!いつもの街がまるごと劇場になる2日間!
●会場＝PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか●料金＝無料

[ボランティアスタッフ募集]
『大道芸 in とよはし』と一緒に盛り上げてくれる仲間を大募集します。パフォーマンス会場の運営、日本人パフォーマンスの付き人、海外パフォーマンスの付き人(通訳)の、3つの中から選んでご参加ください!
●対象＝18歳以上で下記の事前説明会に参加できる方●事前説明会＝4月17(金)19:00～21:00、4月18(土)13:00～15:00 ※どちらか1日に必ずご参加ください。●募集人数＝40名程度●活動場所＝PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか●申込方法＝①参加申込書に必要事項を記入の上、窓口にて持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより申込み。

5/11[月]18:30開演 立川志の輔 独演会

●会員先行＝3月8日(日)●一般発売＝3月15日(日)
●出演＝立川志の輔●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般4,200円ほか※発売日初日は、お一人様2枚までの枚数制限有り。

5/12[火]19:00開演 プラットワンコインコンサート2020 Lis(リス)

「若手音楽家に活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を提供する」というコンセプトのもと、オーディションで選ばれた若手音楽家たちによる音楽のひとつをお届けする、プラットワンコインコンサート。ソプラノ歌手、ヴァイオリン、ピアノの3名で構成されるLis(リス)。実力十分の聴きごたえある3名の共演をお楽しみください。
●会員・一般同時発売3月19日(木)●出演＝Lis[リス]波多野千夏(ソプラノ)、寛悠里(ヴァイオリン)、植田結衣(ピアノ)●会場＝PLATアールスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]500円



市民と創造する演劇
グッバイ・フランケンシュタイン
一穂の国の怪物たち

6/3[水]19:00開演・4[木]13:00開演 ガールズ&ボーイズ-Girls&Boys-

6月4日
13:00のみ

●会員先行＝2月29日(土)●一般発売＝3月14日(土)
2018年にロンドン、ロイヤルコर्ट劇場で初演され、たちまち評判を呼んだ一人芝居。その後ニューヨークでも上演され大きな話題になりました。一人の女性が語るの、運命の男性との馴れ初めから、恋に落ち、結婚し、家庭を持つ彼女自身の話。軽妙な幕開きから、衝撃的な結末まで観客を惹きつけてやまない一人芝居を長澤まさみが演じます。
●作＝デニス・ケリー●翻訳＝小田島創志●演出＝蓮葉竜太●出演＝長澤まさみ●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席6,000円、A席4,000円ほか※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

6/13[土]・14[日]時間未定 “KERAX古田新太”新企画 新作公演(プレビュー公演)

●会員先行＝4月11日(土)●一般発売＝4月25日(土)
古田新太座長のユニットに新たなキャストを迎え、強烈な「ブラック Comedy」をお届けします。KERAX曰く、「昨今のひどい世の中には真っ黒な喜劇で一石、いや、七、八石投じたい。」とのこと。
●作・演出＝ケラリーノ・サンドロヴィッチ●出演＝古田新太、小池栄子、秋山菜津子、大東駿介ほか●料金＝[全席指定]料金未定※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。[特別協賛:サーラグループ]

6/20[土]14:30開演・21[日]14:30開演 PLAT小劇場シリーズ 近藤芳正 Solo Work『ナイフ』

マイセレクト4

●会員先行＝2月22日(土)●一般発売＝3月7日(土)
全ての登場人物を演じ分ける俳優の近藤芳正のソロプロジェクト。息遣いや姿勢や筋肉の動かし方で性別や年齢も演じ分け、新たな一人芝居を創作します。
●原作＝重松清『ナイフ』(新潮文庫刊『ナイフ』所収)●脚本・演出＝山田佳奈(口芝っ)●フィジカルコーチ:大石めぐみ●出演＝近藤芳正●会場＝PLATアールスペース●料金＝[全席指定]一般4,000円ほか

6/27[土]13:00開演・28[日]13:00開演 未練の幽霊と怪物-『挫波』『敦賀』-

6月27日
13:00のみ

●会員先行＝3月21日(土)●一般発売＝4月4日(土)
現代演劇の旗手として、国際的に活躍するテレルフィッチェ主宰・劇作家・演出家の岡田利規。能のスタイルを用いた音楽劇を上演します。
●作・演出＝岡田利規●音楽監督・演奏＝内橋和久●出演＝森山未來、片桐はいり、栗原類ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,500円、A席3,500円ほか※発売日初日は、お一人様一申込につき1公演4枚までの枚数制限有り。

7/11[土]14:00開演 イクウメ 新作公演

マイセレクト4

●会員先行＝3月7日(土)●一般発売＝3月21日(土)
紀伊國屋演劇賞受賞など、現代日本演劇を牽引する劇作家・演出家の前川知大が主宰・作・演出を務める、劇団イクウメ。超常的な世界観で、日常生活の裏側にある世界から人間の心理を描いていきます。
●作・演出＝前川知大●出演＝浜田信也、安井順平/池谷のぶえほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席5,500円ほか

8/26[水]13:00開演・27[木]13:00開演 プラット親子わくわくプログラム 『二分間の冒険』

8月26日
13:00のみ

●会員先行＝5月23日(土)●一般発売＝6月13日(土)
子どもたちに人気のファンタジー小説「二分間の冒険」がおしばいになります。気鋭の作家・演出家の山本卓卓がつむぐ言葉や世界と人気がイラストレーター・ひらのりょうの描くアニメーションで主人公の少年・悟の冒険が、どんな舞台になるのかお楽しみください。
●原作＝岡田淳(偕成社刊)●上演台本・演出＝山本卓卓●アニメーション＝ひらのりょう●音楽＝加藤訓子●出演＝百瀬朔、佐野瑞稀、青山勝ほか●声の出演＝犬山イヌコ●会場＝PLATアールスペース●料金＝[全席自由:日時指定・整理番号付]大人3,000円、子ども(高校生以下)500円ほか[特別協賛:サーラグループ]

高校生と創る演劇『夢の教室(仮)』出演者・スタッフ募集

公募による高校生出演者とスタッフが、劇場やプロのスタッフとともに上演する演劇の第7弾。劇団 mizhen の藤原佳奈の作・演出によるオリジナル作品をお届けします。
●対象＝2002年4月2日～2005年4月1日生まれで、稽古、公演日(11/7(土)、11/8(日))に参加できる方●定員＝出演者:15名程度、スタッフ:若干名●審査＝[1次]5/23(土)、5/24(日)のどちらか1日[2次]5/31(日)●申込方法＝4/24(金)17:00までに参加申込書に必要事項を記入の上、窓口にて持参か郵送。

市民と創造する演劇『甘い丘』出演者募集

公募による出演者が、劇場やプロのスタッフとともに上演する演劇の第7弾。PLAT芸術文化アドバイザーである劇団 KAKUTA の桑原裕子が、作・演出をつとめます。
●対象＝20歳以上に見える方(18歳以上対象)で、ワークショップ、稽古、公演日(2021年3/6(土)、3/7(日))に参加できる方●定員＝12人程度(選考)●審査:[1次]書類[2次]5/16(土)[3次]5/17(日)●申込方法＝4/10(金)17時までに参加申込書に必要事項を記入の上、窓口にて持参か郵送。

プラット親子わくわくプログラム『二分間の冒険』エキストラ募集

●対象＝12～25歳で、稽古(8/24(月)、25(火))、公演日(8/26(水)、8/27(木))に参加できる方●定員＝10人程度(選考)●審査＝5/30(土)●その他＝審査日程など詳細はホームページにて確認ください。●申込方法＝4/17(金)17時までに参加申込書に必要事項を記入の上、窓口にて持参か郵送。

「無敵の大人たち」

芸術文化アドバイザー
桑原裕子



『荒れ野』舞台写真 2019年12月 PLAT アートスペース 撮影:伊藤華織

30代後半、突然にもかまにいきどまりを感じて苦しくなったことがあります。

私は俳優、劇作、演出と三足のわらじを履いていますが、そのどれもが中途半端で、しんどく感じていた時期だったのかもしれない。

脚本を書くのが辛い。これは未だにとうだけれど、当時は今以上にその労と見合う対価がなかったの、浪費する時間が報われない事へのやるせなさをいつも感じていました。

俳優として出たい芝居がない。これは実際には嘘で、やりたい芝居は山ほどあるのだけど、呼んでもらえなかったり、どうやってそこに立てるかかわからない、という苦しさ。20代の時は、出たいと思えばどこにでもチャンスはあると思っていたのに、オーディションの年齢制限で切られたり、若者に交じってオーディションを受けること自体に躊躇が生まれたりするのがこの頃。目だけは肥えてきているから、出られれば何でも良いと思えるわけでもなく、呼ばれた場所に焦って出演を決めたけど「こういうことがやれたかったの?」と稽古場で勝手に苛立つこともありました。

演出が難しい。笑っちゃうくらい当たり前のこと描いていますけどね。若手俳優とは年齢差が出来て共通言語が少なくなり、目上の俳優にはどこまで自分の我を通していいものか気を遣い…やりたい表現を模索する難しさというより、老若男女、千差万別の俳優と向き合う難しさに参ってしまいうこともありました。

こうして書き出してみると、ほとんどが未熟な悩みだなと思います。ですが、若いとは言えず、中年とも開き直れないこの時期、同じような鬱屈を感じてる人は演劇人に限らず多いのではないのでしょうか。

自分がいつ、どの時期にこれらの悩みから解放されたのか、明確なタイミングは思い出せません。でも、いつの間にか自分自身の内面が変わっていった。その大きな推進力となったのは、現在40代の私より、うんと年上の、本当にカッコイイ大

人たちと出会えたことだったと思います。

「私、49の時に俳優としての挫折を味わったの」と話してくれたのは演出家で女優の木野花さん。

ある舞台へ花さんが出演したときのこと。思うように体が動かず、喉は哽れ、演出家の要求に応えられないなんて、ああ自分は役者にむいてないんだと思ったのだそうです。でもそこで諦めなかった。ボイストレーニングに通い、来た仕事はどんなものでも全て受け、やれることはなんでもしようとして心を入れ替えて臨んだ結果、五年後にしてあの挫折を味わった舞台を再演するチャンスが訪れた!その時、40代の頃の自分よりも体が動いて、喉も哽れずにやりきれたのだとか。あの時の挫折が自分を変えたんだと仰います。

今、木野花さんのご活躍は皆さんの知るところです。演出家として確かな信頼を得ている傍ら、昨年はキネマ旬報ベストテンの助演女優賞に選ばれました。

「今がいっぱい忙しいのよ」と笑う木野花さんは、本当にカッコイイです。

昨年『忘れてもらえないの歌』という舞台で一緒に銀粉蝶さんは、共演させていただくのは二度目ですが、私はいつも舞台上で心が震えて痺れるような感覚を味わいます。特に『忘れて〜』の舞台では劇中で銀さんが歌うシーンがあったのですが、その歌の美しいこと!銀粉蝶さんはしゅちゅう「私ワガママだからさ、嫌なことは嫌って言うっちゃうの」なんて仰るのに、舞台上で歌う彼女は誰よりも幸福そうに輝いていて、これがステージに愛されることなのだと、そのまぶしさに涙が出るのです。

豊橋PLATで再演した『荒れ野』。最年長の小林勝也さんは、「これやってみたいんだけど」と毎日稽古場にアイデアを持ち込んで試していました。そのユーモアセンスの鋭さ、若々しさ。自分の描いた本なのに、勝也さんから教わることばかりでした。

として、我ががPLATのアソシエイト・アーティスト

スト平田満さんがどれほど素敵かは、私より豊橋の皆さんの方がよくご存じかと思います。これまでの輝かしい経歴をなにごとに驕らず、常に謙虚な佇まいでありながら、自らが実験的な場に身を置くことを恐れずに愉しんでいます。若者にお説教をとくようなやり方ではなく、自らの背中での多くのことを教えてくださる方だから、私たちは自然と彼の往く道を見つめてしまうのだと思います。

そう。鬱屈した自分、中途半端な自分にいきどまりを感じたら、圧倒的にカッコイイ大人に出逢うことです。

本当は、同世代や自分よりずっと若い子たちにも、そういうカッコイイ人はいるんですが、それを認める度量が自分についてこない時もありますからね。無理して同世代や若者たちを見て今の自分と比べ惨めになるくらいなら、現役バリバリの、むちゃくちゃカッコイイ大人を探してみるのはどうでしょう。

「すげえ奴らがいるんだな、オラわくわくしてきたぞ」天下一武道会の孫悟空みたいな事を言ってしまうけど、本当にそうです。そんなすごい人たちを見つけれられた自分のことも、ほんのすこし誇らしく思えるはずです。

さて、今年私は渡辺えりさんと一緒に色々面白くやらせていただく予定です。

俳優・演出・劇作家であるえりさんは、まさに私からすると「圧倒的にカッコイイ大人」ですが、同時に「永遠の演劇少女」でもあります。夢に溢れ、傷つきやすく、けれど決して希望を捨てない少女がいつも心の中にいるから、えりさんは演劇人としてだけではなく女性としても魅力的。

上に挙げた方々は、大人でありながら、内側に永遠の少年少女がいるんです。年を重ねて得るものと、永遠になくならないもの。どちらも持てれば無敵です。

そんなカッコイイ大人に一歩でも近づけるように、ワタクシ、今年も頑張ってみようと思います。

SUPPORT

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

Gallery 48
呉服町48 TEL.54-4848

有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 〒440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 〒435-0007 Tel.053-422-3628(代)

グロリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話 053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科 (不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋 竹内産婦人科) 053-52-1111

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

うつ、統合失調症、精神遅滞、発達障害、脳梗塞、人工透析、人工関節など
豊橋・豊川障害年金相談センター
初回相談無料 ☎0120-891-498
豊橋市花中町 160-9 障害年金専門社会保険労務士 竹下英司

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

ONOCOM なければつくる
株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283 (代)

創業文政年間 数きく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御茶席菓子専門店
若松園
御菓子司

西村能舞台
豊橋市上伝馬町
代表=西村能三
Mail=nbunbukai@gmail.com

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259 (小川恵司)

安心・安全な地下駐車場
パ・ガ500
ソウの親子の
看板の目印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は
30分 150円を30分 100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長 塩之谷 昌 院長 塩之谷 香 副院長 市川義明
豊橋市植田町関取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 傘あくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話 0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本 豊川堂
本店・カルミア店・アビタ向山店・プリオ豊川店
セントアール山原店・さきしまグローバルゲート店

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

生活にフィアックオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER

チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く 10:00~19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]

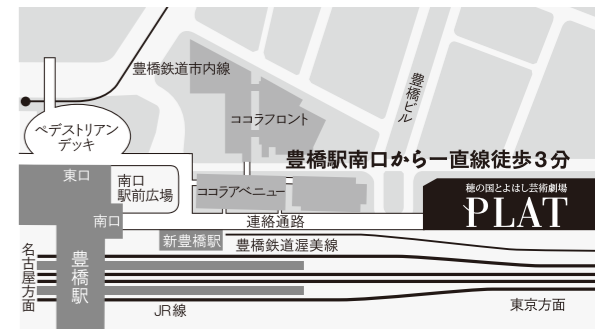


プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

U25・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U25[25歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。



〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00~22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT